

## 17世紀イングランドの階層構造

金 屋 平 三\*

### The Class Structure in Seventeenth-Century England

Heizo KANAYA

イングランド社会を問題にする場合、まず最初に理解する必要があるのは、その特有な、他のヨーロッパ諸国とは違った不平等の構造、階層構造であろう。ライトソン（1991）は17世紀のイギリス社会史を書いた際、まずその第一章で「人々の位階」を取上げ、「イギリス人の中に存在する差異は、歴史を総体的に理解しようとする場合、常に決定的なことだ…。この差異を無視したり、曖昧にしたり、その意義を見誤ることは、過去についてのわれわれの画像を歪めることになる。」(p.56)と述べる。ところで、イングランドの歴史を考える場合、ジェントルマン (gentleman) という言葉はその特有な不平等の構造を端的に象徴的に示している。初期近代のイングランドにおいてジェントルマンとは一体どのような人々を指示したのであろうか。「オックスフォード英語辞典」(O. E. D.)によれば、gentlemanはフランス語のgentilhomme (イタリア語ではgentiluomo、スペイン語ではgentilhombre) に倣ってつくられたものである。従って、gentlemanはラテン語系の単語とアングロ・サクソン語の単語との結合であるということになるが、この結合において、gentlemanの語はラテン語系の語が意味することとは違った、イングランド特有の意味を持つことになった。アレクシ・ド・トクヴィル (Tocqueville, Alexis de, 1978) は1859年に最初に出版された書物においてフランスの貴族制の説明をする際にイングランドの貴族制との違いを取上げているが、そこでgentilhommeとgentlemanの意味が全く違う（後者は前者に由来するにもかかわらず）ことに触れている。「イングランドの貴族は他のいかなる国の貴族よりも、より如才がなく、俗事においてより賢明で、新しい考えをより容易に受入れると言われているのをよく聞く。次のように言うのがより真実に近いだろう。もし「貴族」(“nobility”) という用語を他の国でこの語が持っている意味で使うとすれば、イングランドには長い間貴族は存在しなかったのである。

この奇妙な革命（実際革命的であった）は時の霧の中に隠されているが、われわれはその痕跡をイングランド語において探り当てることが出来る。幾世紀もの間“ジェントルマン”という語はイングランドにおいてこの語が作られたときに持っていたのとは全く違ったふうに使われてきたのである。」(p.83) トクヴィルはgentilhommeとgentlemanの違いを次のように説明する。「フランスではgentilhommeの語の適用範囲を広げるという問題は存在しなかった。この語は実際フランス革命以後は一般的には使用されなくなった。それはこの言葉が常に（排他的な一引用者に

よる) カスト (caste) のメンバーを指示するのに使われてきたからである。」(pp.83-4) 他方、「もしわれわれが “gentleman” (われわれの *gentilhomme* からの派生語) というイングランド語の時代と場所の違いによる変質の過程を追っていけば、われわれはイングランドではいろいろな階級が互いに近づき合い混じり合うにつれて着実にその意味合いが拡大されるのを知る。ある世紀から次の世紀に移るにつれて、われわれはこの言葉が社会的階層において少し下の男たちに適用されるのを知る。」<sup>1)</sup> (p.83)

ヨーロッパの他の諸国とは違って、イングランドでは誰がジェントルマンであるかは必ずしも生れによっては決まらなかったし、また、逆に、ジェントルマンの家に生まれたからといって、ジェントルマンであり続ける保証にはならなかった。このことは、イングランド社会の多くの特色のうちの一つであり、またこの社会に、その不平等の構造を温存させながらも、なお特有な動的な性格を与えたと思われる。

ジェントルマンという言葉が、フランスとは違って、生れによってのみ決められる排他的なカストを意味したのではなく、その適用の範囲を広げてきたということは、この言葉の定義が、研究者にとって難しい問題であるだけでなく、同時代者にとっても必ずしも自明なものではなかったことを意味する。17世紀後半から18世紀前半にかけてのロンドンの「中間階級」の生活を描いたアール (Earle, Peter, 1989) は、すでに16世紀以来続いてきた経済的發展、つまり、都市 (towns)、特にロンドンの成長、国内商業と海外貿易の拡張、工業の發展と専門的職業の増大などによって、急速に都市の中間階級に属する人々の数が増加したため、純粋に農村的農業的社会を基準とした社会的区分の体系は無意味なものになったという (p.4)。そして、中間階級 (“middle station” または “the middling sort of people”) と上流階級 (“upper sort of mankind”) とを分ける場合に2つの問題があったという。その一つがまさに「ジェントルマン」の定義の問題であった。「ジェントルマンとは紋章 (arms) を帯びる資格のある人というのが正当なことであった。事実、紋章官たちは17世紀の終りまで誰が紋章を帯びるのに適しており、誰が適していないかを定めるために一定時期に各地を訪れた<sup>2)</sup>。しかしながら、彼らはその決定を強制する刑法上の制裁力を持っていなかったし、多くの人々は彼らの決定に対して無頓着であった。実際に、ジェントルマンらしく見え、振る舞う人は誰でもジェントルマンとして受入れられ得たのである。この点を16世紀にトマス・スミス卿が次のように表現している (Sir Thomas Smith, 1583, *The Commonwealth of England* (1560s) - 引用者による)。“要するに、手仕事をしないで暮らすことができ、ジェントルマンのような態度やふるまいを身につけ、諸費用を負担する者は誰でもマスター (Master) と呼びかけられ、ジェントルマンとみなされる。”このような不精確な定義はその後実際より不精確になっていった。…ナサニエル・ベイリーの辞書の1730年版はその定義においてなお一層より大まかである。“われわれの時代においては金を持つ者はすべてジェントルマンと考えられる。” (pp.5-6) なお、資産を蓄えて、ジェントルマンのように振る舞える人をその地域の人たちがジェントルマンと認めるようになるという風習は都市にのみ限られたことではなかった。農民の最上層であるヨーマン (yeoman) が16世紀から17世紀にかけて「こつこつと土地を寄せ集め、ついにジェントルマンとして認められる」ことや、また、富裕なヨーマンが時折ジェントルマンと記述されることがあった<sup>3)</sup>。

要するに、「ジェントルマンの地位の定義」という問題は「イングランド社会に新しい種類のジェントルマンが出現したことによって一層ひどくなったのである。かつてはほとんどのジェントルマンは自らは働かないで彼らの土地資産の小作料で暮らす田舎のジェントルマンであったという想定は正当なものであった。しかし、17世紀までにはそのような想定はもはや妥当しなくなった。ますます多くのジェントルマンが都市、特にロンドンに住んでおり、都市に住むますます多くの人々が彼ら自身をジェントルマンと呼んでいた。…これらの都市のジェントルマンの幾人かはお田舎の土地の地代で暮らしていたが、多くは主として都市的な投資に依存していたから、この同じ有価証券で蓄積される利潤に投資した引退した中間階級のメンバーと区別することは困難であった。これら二種の人々はまた同じ首都の文化を共有したし、彼らの子供たちがまったく幸せにも互いに結婚したわけだから、両者の区別は無意味なものになった。」(p. 6)

都市の中間階級の人々と田舎のジェントリー (gentry) の家族が入り混ざり、かくて、「イングランドの社会構造を混乱させるもう一つの側面」があった。「紋章官の記録によればロンドンのジェントリーの91パーセントは田舎のジェントリーの次三男であった。」地主であるジェントリーにおいては長男子単独相続制 (primogeniture) が普遍的になってきていたから、次三男が独立して生計を立てる道を見つけなければならなかったが、そのための方法は、彼らに教育を受けさせ、ロンドンで何らかの専門職か商業で身を立てさせることであった。年季奉公 (apprenticeship) の記録によってこのような動向を確認することができる。徒弟としてのサービスはロンドンで事業を始めるための通常のルートであったから、それは、身分を汚すもののように見えたかも知れないが、無数のジェントルマンの次三男によって採られた道であった (Earle, 1989, pp. 6-7)。

さて、中間階級と上流階級とを分ける場合の第二の問題としてアールが指摘しているのは、ジェントルマンの地位の定義の問題と関連することであるが、専門職の人々をどこに位置づけるかということ、彼らはジェントリーという地位を占めるかどうかということである。専門職 (professions) が市民戦争以前の半世紀の間に急速に増加した。これもまた大商人と同様、時代の新しい要素であった。しかし、それは多様なものを含んでいた。「幾人かの著述家たちは“聖職者、法律家や医者のような知識人 (the Men of Letters) はジェントリーという名誉あるメンバーであると考えた。幾人かの人々はさほど確信がなかった。」(p. 5) 先にすこし触れたように、専門職の人々の場合にも、大商人の場合と同様に、ジェントルマンの次三男がその職に就くことによる、また、ジェントルマンの娘との通婚による混ざり合いがあった。アールは「専門職の人々は実際には上流と中間階級の間の中間的な位置を占めた。彼らのうちのいくらか、主教 (bishops)、ほとんどのバリスター (barristers、法廷で弁護をする資格がある弁護士) と医者 (physicians) のような人々は明らかに上流階級のメンバーであった。」(p. 5) と述べる。

ところで、私は先に、初期近代を通じてジェントルマンの意味がますますより不精確なものになり、18世紀初期にはついに「金を持つものはすべてジェントルマン」だという定義が現われたことを紹介したが、このような定義が当時の社会変化の状況を幾分か伝えるものであるにしても、事柄がかように単純であったとは決して思えないし、また、新興のビジネスマンや専門職の一部が何の抵抗もなくジェントルマンの仲間に加えられたわけではなかった。事実、17世紀にはジェ

ントルマンの定義を巡って論争があったことをストーン夫妻 (Stone, L. & Stone, J., 1986) が指摘している。「実際、17世紀を通じて、地方の名士 (squire) の息子が商売や専門職に年季奉公することがジェントルマンの身分の喪失を意味するかどうか、また逆に、ビジネスで金を蓄えた人 (monied man) が土地と田舎の邸宅を手に入れることが自動的にジェントルマンの地位を得ることを意味するかどうかについて、紋章官や古事研究家の間で猛烈な論争が荒れ狂った。決定的な論点は年季奉公の卑しさであった。」(p.17) また、アールは古くからの上流社会と新しいビジネスの世界との間にある種の心理的な緊張が存在したことを述べている。「ジェントルマンのマナーの猿真似をしようとする商人、才人 ('wit') になろうとする町人 ('cit') はロンドンのステージで上演された演劇のよく知られたテーマであった。ジョーダン氏、エドワード・ラベンスクロフトによるモリエールの通俗的な改作物の登場人物である 'ジェントルマンになった町人' は、年を取ってからジェントルマンのようにダンスをし、フェンシングをし、また話すことを学ぶことになったために嘲りの的となった。笑い草になったのは、彼が質の悪いジェントルマンになったからであると同時に、町人としての名誉ある役割を放棄したからである。」(pp.11-2) なお、ストーン夫妻によればこのような両者の間の心理的な緊張はおよそ1670年代から1710年代の間に最も激しくなったという。当時ビジネスを通じて流動資産を所有する人々は「金融関係者」(monied interest) と呼ばれて土地所有者たち (landed interest) と区別され、その存在について論議が行われたが、彼らは次第に「新しい種のジェントルマン」と見なされるようになった (pp.18-20)。

英国の紳士の歴史を描いたメイソン (1991) は紳士の二つの意味を指摘する。その一つは「社会的標識」、「何らかの卓越した身分」を示すが、「実際にはもう一つの意味があり、それは、使う人と時代の違いによって様々に異なる意味内容の陰影を伴いながら、常に、あるいくつかの行動基準を示唆していた。」と語る (pp.23-4)。ところで、「紳士らしく振る舞う」という行動の基準自体が同時に暗黙のうちに社会的不平等を示唆していたと言える。メイソンは「紳士にふさわしい行動の規範は不平等に根ざしていた。性格や育ちの違いはもちろん、暗黙のうちに身分と財産の違いも意味した。」(p.333) と述べる。さらに、彼は「この第二の意味においては、国民の意識の中には、イギリスの公式の宗教に対抗する第二の宗教が生じたようなありまだった。」(p.24) とも述べる。紳士のこのような側面もまたこの国の社会的不平等の構造の特異性と複雑さを示唆していると思われる。今日でも日本で「イギリスは紳士の国だ」として紹介されることがあるのは、恐らく、この第二の意味においてであろう。事実、彼はこの書の最後で、「経験を積んで味をききかける鑑識家の舌は、奇妙に様々な要素が入り混じった現代イギリス人の行動全体に、今でも『紳士』の風味が行き渡っているのを感じとることができる。」(p.343) と述べる。

主として初期近代の上流階級の研究を続けてきたストーン (Stone, Lawrence, 1967) は、「ジェント ('gent.') という語の価値低下による分割線の曖昧化にもかかわらず、また、分割線を越えることが比較的容易であったにもかかわらず、ジェントルマンとその他の分割はエリザベス期の社会に基本的なものであった。」とし、次いで、ジェントルマンの地位を獲得し維持する諸要素について次のように述べる。「エリートの成員資格の前提要件は金銭的な独立ということ、

つまり、筋肉労働、単調な (mechanic) 労働、または専門的な仕事でさえもする必要なしに、働かないで暮らす (to live idly) 能力であった。しかし、他の同様に重要な諸資格は生れ、教育そして地主階級の間に普及していた生活様式と価値体系を採用する意欲であった。なお、ロンドンの大商人が不面目に思ったことだが、富をどのようにして手にいれたかということが、その量と同様に重要であった。… 従って、より高い地位の獲得または維持は富なしには不可能であるにしても、この基本的な社会的分割は富にのみ基づいていたわけではなかった—事実、社会的分割はけっしてそうではない—。金は地位を獲得し維持する手段であったが、その本質ではなかった。その地位を決めるのに決定的なものは生活様式 (mode of life) という、多くの要素を含む概念であった。財産による収入 (private income) はその一つであったが、より重要なのは気前良く消費し、上品に着こなし、惜しみなくもてなすことであった。これらの他にパブリックな事柄に対して正当な知識を示すに十分な教育を受け、ダンスや乗馬、テニスコートやフェンシングの学校で優雅に振る舞うことが出来ることであった。」 (p.27)

さて、ラスレット (Laslett, Peter, 1983) は、ステュアート期のイングランドを論じた際、その社会的不平等の体系におけるジェントルマンを特に取上げて、次のように言う。「小農民 (peasants)、職人 (craftsmen)、レイバラー (labourers)、農夫 (husbandmen) そしてごく少数のジェントリと貴族から成るあの社会で「ジェントルマン」という語は、その厳密な定義は難しいにしても、何か現実的なもの、大変重要なものを意味した。それは、社会的地位 (social status) の注意深く等級順に配列されたシステムにおける他の諸順位の中のひとつの順位であり、決定的に重要な使用方法を持っていた。

ジェントルマンという言葉は伝統的な社会体制がその社会の人々を2つの極端に不平等な部分に分割する際の境界を示すものであった。テューダー期とステュアート期のイングランドのすべての人々のうちの約25分の1、多くても20分の1が社会的不平等の構造においてジェントリとそれより上の身分に属していた。このちっぽけな少数者がこの国のすべての土地の3分の1、または、半分近くまでを、そしてすべての富のより大きな割合を所有していた。彼らは権力を握り、国全体のための政治的、経済的そして社会的なすべての決定を行った。もしある人が、ジェントルマンでなかったら、もし庶民によって頻繁にまたは通常「マスター」(‘Master’) とか「閣下」(‘your worship’) とか呼ばれなかったとすれば、もし他のほとんどすべての人々と同じように洗礼名と姓名以外には何も持たなかったならば、その人は自分の世帯の外の世界ではほとんど問題にされなかったし、自分の小さな村社会とその近隣の外ではほとんど無に近かった。」 (p.27) ラスレットはこの文章のすぐ後で、「『無』(‘nothing’) というのは多分激しすぎる言葉である。」とも言っているが。

なお、ジェントルマンの資質の中で「働かないで暮らす」(to live idly) ということがしばしば指摘されているが、そのことが持つ意味合いをラスレットは次のように述べる。「あの社会構造においてジェントリーという概念は多大な重要性を持った区別を伝えるものであった。その経済は、われわれ自身の今日の日常生活の大きな特徴である省力の方策を決定的に欠いていた。ごく簡単なことをするにも努力が必要であった。井戸から水を汲み上げること、火をつけるために火打ち石の上の火打ち金を打つこと、ペンを作るためにガチョウの尾羽を切ること、それらはす

べて時間、苦難と力を要した。土地での仕事、職人の仕事場での労働は果てもなく厄介なものであった。…そのような中で、ジェントルマンの基本的な特徴は、レジャー活動とは対立的なものとしての必要にせまられた仕事において働かないということであった。」(Laslett, 1983, p. 29) つまり、ラスレットは、生活のために働くということが今日とは決定的に違う世界における労働の持つ重大性を強調し、その世界で働かないで暮らすという単純な事実が当時の人々の序列と地位に対する態度を理解する第一歩だと主張する。

ラスレットは、「地位」(status)や「階級」(class)といった用語は19・20世紀社会のために作られたものであり、「これらの表現は(スチュアート期とは)かなり違った社会構造に帰属する意味合いを持っており」、従って、「地位グループ(status group)や階級(class)はステュアート期のイングランドの一群の人々の記述にはまったくうまく適合しない。」(p.23)と断りながら<sup>4)</sup>、他に適当な用語がないとして、ステュアート期の社会的不平等の構造を指示するものとして、社会的地位(social status)という言葉を使い、「同じ社会的地位を持っておりまたは維持している一群の人々」を「地位グループ」としている。社会的地位とは「人々が同じ社会の成員から受けているさまざまな程度の尊敬(respect)という事態」(p.22)を意味する。

ここでスチュアート期の複雑怪奇な地位の序列と、ジェントルマンとそうでない者という「極端に不平等な部分に分割する際の境界」について見ておこう。ラスレットはステュアート期イングランドの諸地位と序列の一覧表を描いている(Laslett, 1983, p.38)。王室は別として、そのトップには、1. 公爵(Duke)と大主教(Archbishop)、2. 侯爵(Marquess)、3. 伯爵(Earl)、4. 子爵(Viscount)、5. 男爵(Baron)と主教(Bishop)があった。16世紀にトーマス・スマス卿はこれらを「上級貴族(Nobilitas Major)と呼ばれる第一の部分のジェントルマン」(p.31)と定義した。つまり、これらの地位にある者は全体としてスマスによってやはり「ジェントルマン」と記述されたのであるが、ラスレットはこれを「貴族(nobility)または「本来の上流階級(aristocracy proper)とも言っている(p.31)。ラスレットの一覧表によれば、これら5つの地位は全体として「高貴な人(Nobleman)という地位名、ロード(Lord)、レイディ(Lady)というタイトル、更には、5つの地位のそれぞれに特有な呼掛け方(Forms of address. The Right HonorableからYour Lordshipに至る)があった。なお、これらの地位にある人々は「無職」とされている。次に、本来の上流階級の下位には、6. 准男爵(Baronet)、7. 騎士(Knight)、8. エスクワイア(Esquire)、9. ジェントルマンと聖職者(Clergyman)があった。これらの諸地位はスマスによって全体として「下級貴族(Nobilitas minor)と呼ばれる第二の種類ジェントルマン」(p.31)と定義されたものであり、ラスレットはこの第二の種類を「ジェントリ」とも記述している。つまり、この種の人々を特にジェントルマンとする用例があった。すなわち、「15世紀までにはジェントルマンとはその地位がヨーマン(後述)よりは上位で、男爵よりは下位の人であった。」(Hey, 1996, p. 201)ラスレットの一覧表では、この下級貴族は全体として「ジェントルマン」という地位名、サー(Sir)、ミスター(Mr)などのタイトル、更には、これら4つの地位に応じた呼掛け方(The Worshipful, Your Worshipなど)を伴っていた。これらの中には、地主として財産による収入で暮らせる人々の他に、先に述べたように、専門職の人々(将校[army officer]、医者[Doctor of Medicine]、弁護士[Doctor of law])、それに

大商人 [merchant] などが含まれていた。

ところで、これら4つの地位のうち、准男爵は1611年にジェームズ一世によって創設されたものである(その結果、彼はこのタイトルを売ることが出来た)。また、騎士という地位は、元来は武勇の誉れであったが、次第に武勇とは関係なく王室への奉仕に対する報酬として使われることが多くなった。これら2つの地位が王室によって授与されたものであるのに対して、8. エスクワイアと9. ジェントルマンの場合は事情が違うようである。両者はともに元来はきちんと定義されていたようであるが、16・17世紀になると‘エスクワイア’、特に、‘ジェントルマン’を名のる人々が急増し、紋章官はその権威を彼らに対して強制することが難しくなった(Cannon, 1997, p. 405)<sup>5)</sup>。つまり、「この時期には多くのジェントルマンが正当な理由もなく‘エスクワイア’のスタイルを採っていたと言われる。その精確な定義については意見が一致していなかったが、紋章官は大ざっぱに3つの種類の人々を事実上‘エスクワイア’に格付けすることを認めていたように思われる。第一は、准男爵、騎士と貴族の次三男の男の跡継ぎとその子孫、第二に、その祖先がかなり長期に亘ってこのタイトルを使っていたことを示すことが出来るため慣行に基いて公認された権利(a prescriptive right)を持った古くからの家族の長、第三に、他のタイトルを持っておらず、‘エスクワイア’のスタイルを使うことが出来る州長官(sheriffs)、治安判事(justices of the peace)や他の役職者。もちろん、エスクワイアは単なるジェントルマンよりは全体としてより大きな土地を所有していた。単なるジェントルマンとは次三男の分家(cadet branches)かまたは比較的新しく紋章を得た家族の長であった。このようなことは社会的序列と土地資産との間の緊密な関連を知っていた当時の人々によって十分に理解されていた<sup>6)</sup>(Cliffe, 1969, pp. 7-8)。ここで「単なるジェントルマン」(the plain gentlemen)と言われている地位は、ラスレットの序列における第9位のジェントルマンのことである。なお、ストーン(1967)によれば、単なるジェントルマンとは「ほとんどが小土地所有者であったが、一部には専門職の人々、役人(civil servants)、法律家、上級の聖職者たち、大学の学監(dons)であった(p.28)。従って、先に述べたように、この時期に急増した専門職の人々の多くはこの単なるジェントルマンに位置づけられたのであろう。

以上のごとく、初期近代においてイングランド社会を大きく二分する境界線の上の部分に位置するジェントルマンまたはジェントリーとはきわめて複雑な構成を示していたが、この言葉はどうやら当時三通りの意味で使われていたことになる。第一に、それは、トーマス・スミスの定義に見られるように、上級貴族と下級貴族とを合わせた全体を意味した。ラスレットもまたその一覽表でこの全体をジェントリーと記述している。次に、先にその用例を示したように、それは「ヨーマンよりは上位で、男爵よりは下位の人」を意味した。第三に、それはラスレットが序列の第9位に置いている地位、つまり、「単なるジェントルマン」を意味する場合もあった。

さて次に、大きな分割線の下の部分に位置する諸地位に移ることにしよう。ラスレットの一覽表によれば、その下の部分には次の諸地位と序列があった。10. ヨーマン(Yeoman)、11. ハズバンドマン(Husbandman)、12. 職人(Craftsman)、小売商人(Tradesman)、細工人(Artificer)、13. レイバラー(Labourer)、14. 小屋住み人(Cottager)と貧民(Pauper)。「人口の大多数を占める庶民における地位は、ともかくそれが特色づけられる限り、職業に依っ

ていた。その地位とは地位そのものを表現したのではなく、働き (function) の問題であった。」(Laslett, 1983, p.43) が、それだけにジェントリーの場合以上に不確かであった。ただ、ヨーマンだけは、職業ではなく、地位名を表していた。ヨーマンの語は「13～15世紀には主として騎士のサーヴァントまたは家臣 (retainers) に適用された。…テューダー期にはこの語の使用範囲が次第に広がり、ジェントリーの序列の下の富裕な働く農民を含むようになった。」(Hey, 1996, p. 509) という。つまり、この語は職業を表すものではなく、古い起源の身分用語であった。ラスレットの定義では、「‘ヨーマン’とは土地で働く人々のうちで最も成功した者の地位名であった。」(Laslett, 1983, p. 43) これに対し、序列の11位のハズバンドマンという用語は「一般に、農村社会の低いほうの階層をとくに指すものだった。」(ライトソン、1991, p. 44) ハズバンドマンという用語は現代英語からは消えているが、古い世界ではかなり頻繁に使われたようである。それは現代英語の農民 (farmer) を意味する。そこで、序列の10位のヨーマンも11位のバズバンドマンも共に「土地を耕す人々」であって、その職業名はラスレットの一覧表では「ハズバンドマン」となっている。ヨーマンは少数のジェントリーを除けば村の中心的な人物から成る層であり、先に触れたように、彼らは時にはジェントルマンと呼ばれ、更には、紋章官から紋章を帯びることを許可されることもあった。

序列の12位には職人、小売商人、細工人が挙げられているが、これらは雑多なものを含み、また、町と村ではその営業規模やその他の状況がかなり違っていたと思われる。とりわけロンドンでは17世紀末期において人口50万人余りの大産業都市であり、そこには、アール (1989) が描いているように、その頂点には「ロンドンの中間階級の上層において極めて特殊な位置を占める」(p.34) 海外貿易に携わる大商人 (これは多分ラスレットが「ジェントルマン」に加えた大商人だと思われる) がおり、その下にはさまざまな大小の商人や職人が存在し、また、17世紀後半から18世紀初期にかけて多くの産業や商業において企業間の格差が生じてきたという。従って、これらのすべてをラスレットの言う序列の12位に位置づけてよいかどうかいささか疑問がある。しかし、これらの職種は必ずしも11位のハズバンドマンの下位に位置するものではなく、むしろ、両者の多くはほぼ同等の序列にあったとも思われる。というのは、アールの記述に従えば、「ロンドンの諸産業における大多数の生産の典型的な単位は、徒弟とジャーニーマンと共に彼自身の仕事場で働く個人経営の親方であり、この少数の雇人は親方の家族共々仕事場の階上に住むことが多かった。」(p.26) 他方、村の場合、ヘイ (Hey, 1974) が16・17世紀のシュロップシャー州の教区、ミドル (Myddle) の職人について記述したものによると、事柄は意外に複雑である。「職人は16・17世紀のミドルの村では重要な職業集団を形成していた。16世紀中葉の教区の記録では9人のうち1人が職人と記述されており、一世紀後には7人のうち1人が何らかの技能 (craft) で生計を立てていた。これは多分彼の生計の一部を稼いでいたというべきであろう。というのは、これらの人々は土地から切り離されてはいなかったからである。彼らのほとんどは少なくとも小さな土地を持っていたが、幾人かはハズバンドマンやヨーマンと同じ程度の広さの土地を持っていた。…他と違って特殊なのは幾世代にもわたって同じ家業に従事している家族であった。チャロナー家は村の鍛冶屋であり、桶屋であった。レイフィーズ家とウェイズ家は村の大工であり、ホードリー家とテイラー家は裕福なヨーマン—洋服屋であり、諸階層の一番下のところにパーキ



シーズ家やデイヴィーズ家のような貧しい織工がいた。」(p.143) 一口に村と言っても多様であったから、一つの事例ですべてを語ることは出来ないが、ヘイは他の著作 (Hey, 1987) で、16・17世紀においてはこのように工業と農業とに亘って2つの仕事を持つことは、この国の多くの地方、特に酪農地帯では、常に農場経営に専念する必要がなかったので、典型的な生活様式であったという。「人々は諸記録において時にはヨーマンまたはハズバンドマンと書かれ、時には彼らの技能の名前で書かれたりした。というのは、工業と農業とは2つの全く切り離された事業とは考えられていなかったからである。」(p.103)

ラスレットの一覧表では、序列の最後に、13. レイバラー、14. 小屋住み人と貧民が位置している。これらの社会の最下層については記録が少なくなかなかその実態がつかみにくい。ラスレット (1983) によれば「レイバラーは他の2つの地位のどちらかにもなり得た。」(p.45) レイバラーも小屋住み人も共に独立した農業経営者ではなく、その意味で彼らはハズバンドマンではなかった。従って、彼らは特定の職業名を持っていなかった。ここで問題なのはレイバラーと小屋住み人との違いであるが、ラスレットの説明ではどうもこの違いは明瞭ではない。当時の言葉遣いとして“コテッジャー”や“レイバラー”などの言葉はあいまいであって、明確に他と区別して使われていたわけではないようである<sup>7)</sup>。従って、両者は一括して論ずるのが便法かと思われる。要するに、これらの言葉は、「貧民」(pauper)をも含めて、農村の最下層を示していたと思われる(もちろん彼らの間には資産や収入による階層差があったし、また、社会的浮沈があったが)。そこで、初期近代の農村においてその最下層として存在した「レイバラー」と言われた人々はどのような人々であったのかを考えてみることにしよう。そのことによってまたわれわれはイングランド社会の一つの特色を知ることになるだろう。

エヴェリット (Everitt, A., 1967) は、いまだ充分な研究が行われていないテューダー・ステュアート期農村の「貧民層」(the poorer sort)の問題を取上げ、これを「農場レイバラー」(farm labourers)として扱っている。イングランドのほとんどの地域においてレイバラーの土地資産には、他の人々と同じように、二種のものがあった。彼の個人保有の土地と、村の原野、牧草地および荒野における彼の共用権 (common rights) である。1589年の法は新しいコテッジを立てる場合少なくとも4エーカーの土地を付けるべきだとした。この法はすべてのコテッジは(少なくとも4エーカーの)「土地」を持つべきだとする当時の農村の社会の認識を示している点で注目すべきではあるまいか。しかし、この法は充分には強制されなかった。エヴェリットは16世紀から17世紀の40年代にかけて13の州に散在する43のマナーの検地の記録によって650の小土地保有(5エーカー以下)の資料を示しているが、「概して言えば、4または5エーカーもの土地を持つレイバラーは例外的に幸運であった。」そのような者は7パーセントであるのに対し、41パーセントはコテッジと庭園 (garden) 以上ではなかった。このような保有物の平均的規模は農業地域の違いによって多様であった。特に、北部および中部地方の平地では2つまたはそれ以上のレイバラーの家族が1つのコテッジを共有し、家族間で畑 (croft) または庭園を分割することは珍しくなかった。他方、森林地方ではあるコテッジは11エーカー以上、他のものは30エーカーを保有していた(同上, pp. 400-3)。

レイバラーにとって個人的な小保有地は重要ではあったが、彼の生活にとって決定的な要因で

あったのは共用権であった。さまざまな共用権があったが<sup>8)</sup>、特に重要なのは、共同の放牧地を利用する権利であった。放牧地は荒地 (moorland) 地域や森林 (woodland) 地域にはしばしば広範囲に広がっていた。ウースターシャ (Worcestershire) の森林地域のマナー、フェックナム (Feckenham) ではすべての住人が、レイバラーを含めて、一年中いつでも、羊、豚、ガンまたは牛などのすべての種類の家畜を、その数に関係なく共同地を利用して飼育した (同上, p. 403)。

農村のレイバラーのこれらすべての慣習的な権利は多かれ少なかれ注意深く村の条例とマナーの慣習によって規制されていた。これらの細かな規制は、資源が厳しく制限され、コミュニティの感覚が強烈な所では、自然的であり、また、必要なことであった。共用地 (common) に対するレイバラーの諸権利は注意深く統合された経済の一部を形成していたのであり、この経済のバランスは共用地利用者自身に対して重大な結果をもたらすことなしにはとても変更できるものではなかった。エヴェリットはここで「この時代の新しい経済的支配力」が侵入してくる前の農村の社会・経済生活の古い均衡を描いている。「彼らは貧乏な様子ではあったが、これらの諸権利だけで、さもなくば彼らのかろうじての生存に対して少数の簡素な幸運を付け加え、レイバラーたちに希望と独立の感覚を養った。」 (同上, pp. 405-6) と述べる。

しかし、このような経済はこの時代の新しい経済的支配力に対して格別に弱かった。新しい経済的支配力というのは、周知のように、16世紀以来のエンクロージャーである<sup>9)</sup>。従って、テューダー期のエンクロージャー運動に対する最もすさまじい抵抗が貧しい共用地利用者 (commoners) から起ったのは偶然ではない。16世紀以来人口密度の高い谷間や平地ではレイバラーの放牧権は制限されたり、争いが起ったり、消滅したりしていたが、エンクロージャーは、最悪の場合、耕地が強制的に放牧場に切り換えられた所では、全村民の放逐を招き、住民たちは他に仕事を求めるか、すでにテューダー期の田園地域を放浪していた多分2万人にふくらんだ浮浪者の群に加わるかを余儀なくされた<sup>10)</sup>。人口減が起らなかった所でもその影響は革命的であった。つまり、エンクロージャーは、レイバラーたちおよび彼らの先祖が幾世代にも亘ってなれ親しんできた生活様式を破壊せずにはおかなかった (同上, p. 406)。エンクロージャーは、どう見ても、地主に対するレイバラーたちの依存を増大させた。彼らとその共用権を完全に失ったところでは、彼らは単なる賃金労働者 (mere wage-earners) となった (同上, pp. 408-9)。

エヴェリットは遺言検認の財産目録 (probate inventory) を使って16世紀後半から17世紀前半におけるレイバラー全体の動向を推測している<sup>11)</sup>。すべての地域においてレイバラーの農業の基礎は家畜類であったが、財産目録が示す限り、幾つかの重要な変化がレイバラーの牧畜全体の型に起っているように思われる。一方では、真に貧困なレイバラー、つまり、家畜類を全く保有しないレイバラーが (財産目録を残した者のうち) この時期の始めには5パーセントであったのに対し、この時期の終りには13パーセントに増大している。勿論、これには地域差があった。他方、このような資産の減少に対して、ほとんどの地域で4頭またはそれ以上の牛を持つ、暮し向きの良いレイバラーはその地位を保持することが出来た。例えば、イングランド中部地方の森林地域ではそのようなレイバラーの数は実に4パーセントから40パーセント近くまで増大した。このような数字が示唆することは、結局、より小規模に牧畜を営むレイバラーがより大きな規模な者

のために次第に圧迫されてきたこと、より規模の大きい者はハズバンドマンの序列に上昇しつつあり、小さな農民は単なる賃金労働者になりつつあったことである。このような二様の発展においてわれわれは根の深い経済的力の影響を辿ることができる。つまり、その両方の場合において決定的な要因は土地の供給の減少ということであった（同上, pp. 417-8）。

なお、レイバラーの他の収入源として副業（by-employments）があった。先に記した財産目録を残した富裕なレイバラーに関して言えば、3分の2近くの者が何らかの副業に従事していた。この数字は地域によって異なっていて、北部の低地地域では半数近く、サマーセット、ハーフォードシャおよび中部地方の森林地域では5分の4近くであった。これらの産業のほとんどは森林地域の手工業か、または、アマ、アサ、または羊毛の紡績と織布に関係したものであった。もちろん、ドーセットの手袋作り、バッキンガムシャのレース作り、そしてコーンウォールのいぐさのマット作りのように無数の他の地域産業があった（同上, p. 425）。しかし、副業は、レイバラー人口全体から見れば、単なる一部分、単なる少数に利益をもたらしたに過ぎなかったようである（同上, p. 430）。

さて、われわれは以上において、レイバラーの3種の生活資源、つまり、個人的な保有地、共用権、および副業について概観した。このうち個人的な保有地と副業は、レイバラー全体から見ても十分な生活資源となるものではなかった。また、彼らの生活にとって決定的であった共用権が縮小または消滅する中で、かつての農村の均衡が破壊される傾向にあり、レイバラーの社会に二極分解が起こり、特に農耕地域に比べて労働需要の少ない森林地域では移動的なレイバラーが増大しつつあった。こうした状況の中で、ごく少数の富裕なレイバラーの保有地からの収入を除けば、彼らすべての頼みの綱は農場における賃金労働者としての労働であったのであり、こうした労働の比重は増大しつつあった。テューダー・ステュアート期の農場労働者によって担われた仕事は実に多様であった。そのことは当時の農場の計算書や日記によって知られる。一例を記すと、チャールズ一世の時代に農耕地域（arable area）であるイースト・ケントのある地主に雇われていたレイバラーは、庭師、農場管理人（bailiffs）、検査人（lookers）、垣根や家畜の管理人（haywards）、屋根葺、大工、石工、羊飼、耕夫、牛馬の手綱を取る若者（ploughboys）、およびもぐら取り（mole-catchers）、さくらんぼ園・ホップ栽培園や羊の管理人などがあった。この他にも、この地主の賃金計算書は、羊の洗浄と刈込み、農耕地の掘り起し・ならしおよび種蒔き、干し草や穀物の刈り取り・束ねや運搬、木材伐採、石や砂利の掘り起し、生け垣作り、生け垣修理、畝や溝の洗浄、「池に関する」仕事、などに対する支払いを含んでいた（同上, p. 430）。

要するに、テューダー期からステュアート期にかけて時代の進行と共に、土地を持たないかあるいはほとんど土地を持たず、生計のために賃金にのみ依存し、しばしば仕事を求めて方々をさまようか、さもなくば多くの市場町で秋の労働市で雇われるレイバラーの群れが増大した。同時に、主として商業的農耕の発展と農業の地域的専門化の進展が季節的または臨時的な労働需要を大いに強化したため、移動的なレイバラーの新しい群れが次第に発生したが、彼らは主として土地の相続にあずかれない農民から補給されたのである。多分レイバラー人口はわれわれが思っている以上に常により移動的であった。結局、人々と家畜の移動（droving and transhumance）は、ウェールズやノーサンバーランド（イングランド最北部の州）からロムニー沼地（Romney

Marsh) やウィールド地方 (the Weald) (共にイングランド南東部) に至る牧畜地域における古くからの慣習であった。これに加えて、エンクロージャ運動と修道院の解体は多くのレイバラーを彼らの沼地から追い出したのである。そして、都市的地域、特にロンドンの発展は王国全体にわたって農村教区から増大するレイバラーの流入を引き起こしたが、しかし、テューダー期の田園部における移動的な賃金労働者の大群の発生は基本的に異なった現象であった。それは直接的には商業的な農業の需要とレイバラー人口の増大に帰し得るものであった (同上, pp. 399-400)。かくて、16世紀から17世紀にかけてレイバラー人口は絶対的にも相対的にも増大した。「テューダー期とステュアート期初期にはイングランドとウェールズの農村部の全人口の多分4分の1から3分の1が賃金労働によって生活する人々であった。」が、「17世紀の終わりまでにはレイバラー、小屋住み人と貧民は全農村人口の半分近くを占めていた。」という (Hey, 1996, pp. 8-9)。彼らは、ほとんど無産者に近く、自らの労働力を売って生活したが、産業化時代の「労働者」とは異質であった。これらの「土地なき、あるいはほとんど土地を持たない労働者や小屋住み農の運命は、この時代の大部分を通じて疑いもなく悲惨なものであった。」とライトソン (1991, p. 229) は述べる。また、アボットは「社会は経済的独立を重んじていたが、彼 (賃金労働者) は雇われ人であった。老齢期や彼の子供が小さい時には、彼はしばしば慈善を受けるか彼の裕福な隣人たちの支払った税金による援助を受けた。」 (Abbott, 1993, p. 132) と述べる。

さて、以上に述べたような社会的不平等の構造は当時の人々の日常生活の直中において常に確認されるものであった。まず、貴族の邸宅の偉容はその地域を威圧していた。「階級のシンボルとして紋章は誇らしげにジェントリの邸宅であるマナーハウスの出入り口の上部、天井、窓、マントルピース、家族の肖像画、皿や指輪の収集品に飾られた。のみならず、そのような紋章に似た図案がしばしば教会の記念物に取り入れられた。例えば、ポイントン教区教会ではストリックランド家のメンバーへの記念物がいくつか七面鳥の鶏冠を付けて飾られていたが、これは1550年に紋章を許されたウィリアム・ストリックランドがアメリカから七面鳥を導入したことに関連していた。」 (Cliffe, 1969, pp. 3-4) また、これは19世紀の例であるが、「のちのワリック伯爵夫人、デージー・メイナード (1861年生れ) は、彼女が子供の時、教会で礼拝が行われた後の人々の行進を思い出した。‘牧師の祝福が終ると“われわれ”が最初に身分の卑しい隣人たちが見つめる中を一列になって退出した。お屋敷の執事と彼の家族がその後に従った。その後に農民たち、そして最後に小屋住み人たちが出てきた。’…社会秩序のこの儀式的な示威行動は社会的地位の低い人々の記憶の中にも焼き付けられた。」 (Abbott, 1993, p. 39) 教区教会の中でも諸地位の違いは厳然と区別されていた。「このコミュニティ (17世紀のシュロップシャの教区、ミドル) の全員が集まる唯一のフォーマルな機会は教会で礼拝式が行われる時であったが、そのような機会には (他の教区教会と同じように) 人々の席次は厳格に守られていた。」 (Hey, 1974, p. 2)

17世紀イングランド社会において家族が占める位置および家族内の人間関係を問題にする場合、以上のような階層による違いを常に考慮しなければならない。

## 注 釈

- 1) トクヴィルはこの文章に続けて次のように言っている。「次に、イングランド人と共に、それ (gentleman という言葉) はアメリカに渡った。そして今アメリカではそれは無差別にすべての男の市民に適用されている。従って、その歴史は民主主義自体の歴史である。」(p.83)
- 2) 元来、戦闘や馬上武術試合 (tournament) において何者であるかを知らせる方法として、盾や旗にそれぞれ特徴のある印を使うことは、イングランドとスコットランドでは12世紀後半に、ウェールズでは13世紀に発達したようである。そのような図案は急速に一定した世襲的なものになり、印章、上羽織 (surcoat)、建物、ヤステンド・グラスなど広い範囲で使われるようになった。日本語で紋章と訳されるのは英語では coat of arms であるが、これは鎖帷子の上に着た上羽織にこのような紋章を付けたことに由来する。その後、紋章を帯びることはさらに高貴なまたは洗練された (gentle) 生れや身分を表示するという社会的な意味を持つようになった。13世紀の中葉までには紋章による社会的地位の表示は複雑化し、この社会的に問題になりやすい事柄に対して詳細に調べる必要が生じ、紋章官 (heralds) が作られた。紋章官がイングランドの王室の記録に初めて公式に現われたのはエドワード一世 (1272~1307年) の時代である (John Cannon (ed.), 1997, pp. 473-4)。「15世紀以降、上級紋章官 (the kings of Armes または chief heralds) が紋章の真偽を決定し、その名誉に値すると思われる人に紋章を許可する責任を持った。その責任を果たすために彼らは1530年に各州への公式な訪問を行うことになった。その基本的な目的は‘彼らに与えられるべきでないタイトルを不正に盗用し、正当な根拠なしにそのタイトルをかたる卑劣で教養のない種類の人々から、紋章に値する人を切り離し、識別することであった。’このような訪問に当って、ジェントリは特定の認可かまたは長年の使用慣行に基いて公認された権利かによって、彼らが紋章を帯びる権利を有する証拠を提出することを要求された。」(Cliffe, 1969, p. 4) なお、紋章官の各州への訪問は名誉革命時の1688年まで続けられたが、その主要な実地踏査は1580年、1620年と1666年に、また小規模なものが他の年にも行なわれた (Hey, 1996, p. 216)。
- 3) ライトソン, 1991, pp. 36-37; Hey, 1974, p. 107
- 4) ラスレット (Laslett, 1983) は status という語に ‘group’ という語を結合させるのは誤解をまねくとも言う。というのは、この結合語は「連帯、共に行動する用意と言った意味を表わすからである。」(p. 23) また、地位グループという語は階級 (class) という語とは区別して使われている。地位グループとは「同じ社会的地位を持っているまたは維持している一群の人々であり」、階級とは「政治的、経済的な集権的権力の行使において結合している一群の人々である。」先に引用したように、このような権力を行使しようとする人々はジェントリ以上の少数者であり、それに対抗する階級は存在しなかったという意味で、ラスレットはステュアート期の社会を「一階級社会」(one-class society) だとしている (p.23)。なお、この主張が持っている重要な含意は、「従って、前産業化世界における社会変化や発展は勃興し、対立し、そして没落した諸階級との関連で考える必要はない。」(p.37) ということである。
- 5) クリッフ (Cliffe, 1969) によると、1642年のヨークシャにおいて貴族 (トーマス・スミスの言う「上級貴族」のこと) より下のジェントリで紋章を帯びる資格のある者は全部で679人であったが、その内、准男爵は30人、騎士は70人であるのに対して、「エスクワイア」のスタイルを採っている (styled ‘esquire’) 者は256人、「ジェントルマン」のスタイルを採っている (styled ‘gentleman’) 者は323人であり、最後の二者の数がきわめて多いことがわかる (p. 6)。1688年にグレゴリー・キングが行った推計でも同様の傾向が見られ、准男爵が800家族、騎士が600家族であるのに対して、エスクワイアは3,000家族、ジェントルマンは12,000家族となっている (Laslett, 1983, p. 32)。
- 6) 「1641年に下院 (the House of Commons) が人頭税 (a poll tax) を導入することを決定した時、准男爵は30ポンド、騎士は20ポンド、エスクワイアは10ポンドを課せられ、年収100ポンドの資産のあるジェント

- ルマンは5ポンドを払う必要があることが合意された。」(Cliffe, 1969, p. 8)つまり、エスクワイアとジェントルマンという地位の序列の違いは税額という形においても明確に認識されていた。
- 7) 「小屋住み人」(‘cottager’)や「小屋住み農」(‘cottage farmer’)などの用語は16・17世紀の用法ではレイバラーおよびハズバンドマンへ区別なしに適用されていたという(Everitt, 1967, p.412)。他方、ヘイ(Hey, 1974)が、シュロップシャー州の教区ミドルの富裕なヨーマンであったリチャード・ガフ(Richard Gough)が1524年から1701年について書き残したこの教区のきわめて詳細な記録を利用して職業構造を分析してものによると、「レイバラーズ」(labourers)という項目はあるが、「小屋住み人」という項目はない。しかし、ヘイがレイバラーについて記述した箇所を見ると、その中に小屋住み人と言われた人々を含んでいるようである。つまり、両者は明確な区別なしに論じられている。
- 8) レイバラーによって享受されていた共同的な便益は放牧権だけではなかった。彼らはまた、共用地の低木、材木、下草、採石所や砂利採取場などにおける権益を主張し、彼らの家を建てたり修理したり、門、フェンスや編み垣を作ったり、料理または暖房の燃料として使った。レスターシャーの多くの地域やイースト・ライディングのように森林地域または共用地の少い所ではどこでも、この種の共同権は厳重に制限され、従って、冬季におけるレイバラーの運命は辛いものになった。レイバラーはまた共用地の野生の鳥や動物にもあやかっただけでなく、要するに、教区の中に居るすべての生き物は、どんなにささやかなものであっても、質素に暮らす農民-レイバラーまたはその妻によって何らかの役に立てられたのである(Everitt, 1967, pp. 404-5)。
- 9) 「エンクロージャー」(enclosure)という言葉を使う場合、2つの異なった現象を区別することが重要だとエヴェリットは言う。一つは、共用地(common field and commons)の大規模なエンクロージャーで、通常は裕福な借地人または土地所有者によって貧しい共用地利用者の同意なしに行われ、しばしば人口減を伴った。第二には、数ルード(roods=1/4 acre)のみの共用地の小規模なエンクロージャーで、通常は貧しい共用地利用者自身によって行われ、人口減を伴わなかった。‘エンクロージャー’の用語は、当時の用法ではしばしば両方の活動を意味したが、ここでは、明確さを期すため、前者に限定し、後者は‘エンクローチメント’(encroachment)と表示される。レイバラーの社会にとってエンクロージャーとエンクローチメントは正反対の、しかし、しばしば相互補完的な結果をもたらした(同上, p. 406)
- 10) 2万人という数字は多分控えめ目であるとエヴェリットは言う。グレゴリー・キングの推計では17世紀末に浮浪者の数は3万人になっている(同上, p. 406)。
- 11) もちろん、レイバラーの最上層のみが財産目録を残すに十分な財産を持っていた。

### 参考文献

- Abbott, Mary, 1993, *FAMILY TIES—English Families 1540-1920*. Routledge
- Cannon, John(ed.), 1997, *The Oxford Companion to BRITISH HISTORY*. Oxford U.P.
- Cliffe, J.T., 1969, *The Yorkshire Gentry—From the Reformation to the Civil War—UNIVERSITY OF LONDON* The Athlone Press
- Earle, Peter, 1989, *The Making of the English Middle Class—Business, Society and Family Life in London 1660-1730—Methuen* London
- Everitt, Alan, 1967, Farm Labourers: in Joan Thirsk(ed.), *THE AGRARIAN HISTORY OF ENGLAND AND WALES. IV 1500-1640*. Cambridge at the University Press
- Hey, David, 1974, *AN ENGLISH RURAL COMMUNITY Myddle under the Tudors and Stuarts*. Leicester University Press
- Hey, David, 1987, *Family History & Local History in England*. Longman Group UK

- Hey, David(ed.), 1996, *The Oxford Companion to Local and Family History*. Oxford U.P.
- Laslett, P., 1983, *The World We Have Lost—further explored*. 3rd edition, Routledge
- Mason, Philip, 1982, *THE ENGLISH GENTLEMAN-The Rise and Fall of an Ideal*. (フィリップ・メイソン／金谷展雄訳 1991『英国の紳士』晶文社)
- Stone, L., 1967, *The Crisis of Aristocracy 1558-1641*. Abridged Edition, Oxford U.P.
- Stone L. & J. C. F. Stone, 1986, *An Open Elite? England 1540-1880*. Abridged Edition Oxford U.P.
- Tocqueville, Alexis de, 1978, *The Old Regime and the French Revolution*. Translated by Stuart Gilbert, Peter Smith (Originally published in 1859)
- Wrightson, Keith, 1982, *English Society 1580-1680*. Hutchingson & Co.Ltd. (キース・ライトソン／中野忠訳 1991『イギリス社会史 1580-1680』リプロボート)

